

論文の内容の要旨

論文題目 中国史像と政治構想——内藤湖南と梁啓超との比較

氏 名 朱 琳

本研究は、日中両国それぞれの代表的な思想家、内藤湖南（1866－1934）と梁啓超（1873－1929）の二人を分析の対象として取り上げ、それぞれの中国史像と政治構想、および歴史観と政治観との関連に焦点をあて、実証的な手続きを踏みながら比較研究を行ない、こうした諸問題を明らかにしていこうとする試みである。

本研究は、序章・第Ⅰ部・第Ⅱ部・第Ⅲ部・終章から成る。

まず序章では、なぜ内藤湖南と梁啓超の二人なのか、という問題意識を明らかにする。

第Ⅰ部は、「内藤湖南と梁啓超」と題する。第一章「内藤湖南——論説記者から歴史学者へ」と第二章「梁啓超——言論人・政治家・学者」において、二人それぞれの思想形成を跡付け、第Ⅱ部、第Ⅲ部での議論の前提とする。

第Ⅱ部は、「二つの中国史像の構想——歴史観と政治観との間」と題する。

第三章「時代区分——「文化」の基準と「政治」の基準」において、まず、日本の近代歴史学の成立と時代区分の導入に着目し、ついで、「文化」を基準とする湖南の「宋近世説」について分析を行ない、その文化史研究の原点が日本史認識にあり、若き日の論説にすでに後年の時代区分論の萌芽を見出すことができることを指摘する上で、湖南の「上古—中世—近世」という三区分の二つの区切りに、それぞれ中国文化本位の「波動説」と辛亥革命につながる「唐宋変革論」があったことを解明する。

第四章「国家政治体制の構想——歴史の伝統に見出す未来像」において、まず、明末清初と清末が「封建一郡県」論の二つのピークをなしていることを指摘し、ついで、湖南の「郷団自治」論と梁啓超の「地方自治」認識、および「聯邦制」をめぐる二人の議論について分析を行ない、二人の議論における異同を比較しつつ、その原因を明らかにする。さらに、二人の体制構想を広い文脈に位置づけるために、附論「自治の伝統と「聯邦制」の体制構想」を設け、同時代の日本の知識人の山路愛山・吉野作造・橘樸の三人の見解にも目を向け検討する。

第Ⅲ部は、「歴史観と政治観の深層——「伝統」と「近代」の狭間で」と題する。

第五章「「文化」の視座と「文明」の視座——東西文化比較論」において、湖南における「文化」の視座と梁啓超における「文明」の視座をそれぞれ明らかにした上で、文化の「民族性」と「時代性」の問題を考察する。

最後に、終章において、毀誉褒貶の分極にあった二人に体现された学問と政治、文化と政治の問題を浮上させる。

以上、本研究をもって、内藤湖南と梁啓超の二人が、いかなる形で歴史像の構築にかかわり、また、いかなる政治構想を打ち出す試みを行なったのかを明らかにし、学問と政治、文化と政治の関係をどう処理するか、という現在でも重要な問題をいま一度問い直す。